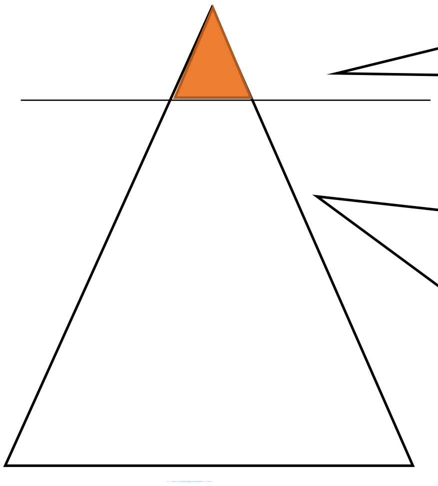
つまずきを読み解く視点
～氷山モデル(２)～

兵庫県立芦屋特別支援学校
平成31年　2月27日(水)
地支セン通信　Ｎｏ．23

地支セン通信No.22でお伝えした氷山モデルを使って、もう一事例考えてみたいと思います。

～氷山モデルを活用しよう～

先生や友達と話している時に突然「叩く」、授業中に突然「物を投げる」などの行動がみられる子についての隠れている要因を考えてみましょう！



＜見えている姿＞
「人を叩く」
「物を投げる」

＜隠れている要因＞
「嫌なことを拒否できないのかもしれない」
「自分の思いが伝えることができないかもしれない」
「何を言われているのかわからないのかもしれない」
「先生や友達との距離に不快を感じたのかもしれない」
「わからないと言えないから、わからないまま授業が進んでいっているのかもしれない」
「今していることが、いつまで続くのかわからないのかもしれない」
「好きなことをしたいのに、いつになったらできるのかがわからないのかもしれない」

隠れている要因からこんなアプローチができるのでは・・・

‣人との距離感の学習

人にはそれぞれパーソナルスペースがあり、人との距離の感じ方はそれぞれ違うことを視覚支援などを活用しながら学年全体、クラス全体で学習する。

‣成功体験の獲得

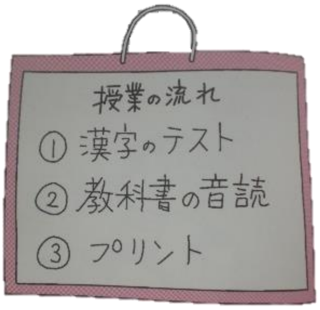
叩く代わりに具体的にどうすればよいのかということを、絵カードや表情・気持ちカードなどで伝えていく。うまくできた時には褒め、やりとりができる喜びを感じられたり、伝わったという体験を増やしたりしていく。

‣わからないことを伝えることができる環境

「わからない」をさまざまな言い方で表現し、間接的に「わからない」ことを伝える言葉を授業に積極的に取り入れていく。

例)「正直、ぴんと来ていない人？」「なんだかすっきりしないなぁという人？」
「一人で考えるのは無理だと思う人？」

‣活動の見通し

授業の流れを書いて提示する、タイムタイマーなどにより時間の経過を見てわかるようにするなどの工夫を行う。

好きなことができる時間をあらかじめスケジュールの中に示しておく。